

一目でそれと分かる木造アパートの一室。

住人は一人暮らしのようだ。小さなテーブルの上にお茶のセットが乗っている。

壁際には本棚やカラーボックスが置かれている。衣装ダンス、小さなテレビ、小さなオーディオセット、丸い椅子、東京タワーの置物とか、わけの分からない置物たち。雑然。

雑然。雑然。コンビニの袋に入れられた日々のごみ達。どうも普通じゃない。なにかが普通じゃないのだ。この部屋の住人はきつと60歳くらいのおじさまだ。調度品はみんな年代ものだ。しかし色が ない。みんな昔の写真の中のようにくすみ、灰色。

唯一のドアにすりガラスが嵌め込まれていてそこから夕日がみんなをセピアに染める。ただ、ノートパソコンだけが異色。

(電車の通過音)

この部屋の住人「目黒 純一郎」が鍵をガチャガチャやった後、ドアを開けて入ってくる。バイクのヘルメットを被っている。ヘルメットをとりカバンとスリッパを定位置におく。大きくため息。しかたなくカセットコンロをガチャリと着けてやかんをかける。(

純一郎

その日、私はいつものように5時きっかりに部屋にたどりついた。そして、二酸化炭素を作るためにガスコンロに火をつけた。二酸化炭素を作り、地球を温暖化して

あつたまろうと思つたのだ。そのついでにお湯も沸かした。夕食の準備をするためである。お湯が沸くまでの間、メールを確かめるのが日課なのだが・・・その日もメールを確かめた。

(パソコンの電源ははいつていた。メールチェック。)

純

なんにもない。からっぽだった。いや、別に何かを期待してたわけじゃない。からっぽであることが普通の状態だったのだ。前回メールが届いたのは・・・ええと・・・かなり前だった。内容は覚えている「突然のメールお許し下さい。お金払いますからエッチな事しましょう。連絡待つてまーす。ナミエ」信じられない内容だった。どぎまぎして消去してしまったが。あれ以来メールは来ていない。やっぱり連絡したほうがよかったかな・・・。

(カバンからコンビニの袋を取り出し、中からカップラーメンを引っ張り出す。)

純

近くのコンビニで買ってきたカップラーメンを調理する事にした。

そう、具の入った袋を破って中身を麺の上にはら撒く。そしてじつとお湯が沸くのを待った。ここまではいつもどおりだった。いや・・・いつもどおりだと思つた。

(ゆっくり立ち上がる。)

純

と、そのとき・・・。

(間、電車の通過音)

純

何も起こらなかった。やっぱり何も起こらなかった。

(ゆっくり座る)

純

ふと笑いたくなかった。何も起こらないって事がとてもおかしく思えてきて、久しぶりに笑ってみようかなと思った。・・・でもやめた。久しぶりに笑ってみようか、なんて思ってた笑えるわけがない。仕方なく昨日の続きをやることにした。

(ダンボール箱から得体の知れない機械を取り出す。平べったい缶詰の大きなやつ。

いかにも爆発物のようなもの。パソコンのあるページを見ながら)

純

昨日までのところは第1ステップだったが、今日からは第2ステップだった。

かなりの危険が伴うらしい。各ページにっこり笑っている髑髏のマークがちりばめてあった。

画面をよく読んだ。「変圧器からの赤いコードをファイラメントにつなぎ、

青いコードをニトログリセリンの入った小ビンにつなぐ。

「注意せよ。赤いコードと青いコードを間違うと場合によっては命を落とすことになる。」

注意することにした。赤いコードをファイラメントに、青いコードをニトログリセリンに。

赤いコードをファイラメント、青いコードをニトログリセリン。赤いコードを・・・。

その時、とても緊張している自分に気づいた。手にはじっとりと汗をかいていた。

赤いコードを・・・どっちだったかな？ええと、ニトログリセリン？

え？逆？手が震えていた。そのとき・・・お湯が沸いた。

(やかんから熱湯をカップラーメンに注ぐ。)

純

なぜか救われたような気がした。カップから立ち上る湯気を見ると、少し気持ちが落ち着いていた。今日は体調が悪いから、また明日やろうかなと思った。しかし・・・

赤いコードをファイラメント。青いコードをニトログリセリン。もちろん覚えてしまっていた。

しかも、3分間待つ事になる。ラーメンが出来上がるまでの3分間でコードを繋ぐことくらいできるだろうと、誰かが言った。

やることにした。赤いコードをファイラメント。青いコードをニトログリセリン。

(また、2本のコードを手を持って・・・)

純

そのとき、また不安になった。

このページを作った作者が間違ってるってことはないのだろうか。

キーボードでAKAとAOを間違うつて事もあるんじゃないだろうか。赤と青。

漢字も似てる。一文字だし。ふとスタンダールの赤と黒を思い出した。

何の関係もないが、頭に浮かぶのだからしかたない。

次に、人体の血液の流れを描いた図がうかんだ。動脈血は赤。静脈血は青。

いやまてよ、肺動脈は青じゃなかったかな？肺動脈は青で、ニトログリセリンは赤。

・・・そのとき、時計の秒針の音が聞こえてきた。

3分まであと90秒だと誰かが言った。あせってきた。あと90秒しかない。

その90秒で赤いコードと青いコードを繋がないと大変な事になる。

カップラーメンが大変な事になる・・・様な気がした。

時計の秒針の音がチクタク、チクタクと・・・さてよ、チクタクってなんだ？
なんでチクとタクなんだ？コチコチとか、カチカチが普通だろ。
だいたいどっちから始めるんだ？
タクから始めても同じはずなのにタクチク、タクチクじゃなぜか変。
などと考えているうちにあと60秒になった。
頭に血が昇ってきた。ええと、赤い血？青い血？どっちだっけ？
赤い血は動脈血だが肺動脈は青い血。
ええと、あと30秒になった。だんだんどっちでもいいんじゃないかと思えてきた。
赤だろうと青だろうとたいした違いはないんじゃないか。あと10秒。どっちでもいい。
どっちでもいいからフィラメントとニトログリセリンに繋ぐことにした。
・・・とそのとき。

(電車の通過音)

純 何も起こらなかった。誰かが扉をノックするとか、電話がブルブルするとか、
何か起こってもよさそうだが、何も起こらなかった。
なぜか、だんだん腹が立ってきた。どうしてこう、何も起こらないんだろうか。
僕は何か悪い事でもしたんだろうか。何かわけの分からないものに対して腹を立てていると、
腹は立ってるだけではなく、減ってもいる事に気がついた。
・・・ラーメンを食べる事にした。

(カップラーメンを食べ始める)

純 完全に、のびていた。麺はコシも歯ごたえもない、ただの小麦粉の塊りになっていた。
でも、けっこううまいのだった。

(どンドン食べる。と、そのとき誰かがドアをノックする)

純 ……。

(また、ノックする。純、カップを持って立ち上がる)

純 来た。来ましたー。はいはいー！

(いそいそとドアを開けると男と女が立っている)

女 夜分にすみません。あ！お食事中でしたか、失礼しました。

純 いや、食事って言うほどのものじゃないんです。で、なにか？

女 どう思われますか？最近の日本について。

純 は？最近の日本？

女 はい。子供たちははじめを苦にばたばたと自殺。

漫画喫茶にはフリーターやニートがひしめき合い、熊野古道や知床半島には団塊の世代がひしめき合う。そんないびつな社会を作っておきながら誰も責任をとろうとしない。こんな日本についてどう思われますか？

純 どう思うって・・・その、一言じゃ無理ですよ。あの、狭くてむさくるしいところなんですが、中で話ませんか？と、思わず口走ってしまった。

女 は？

純 いえ、立ち話もなんですから、お茶でも飲みながらゆっくり話しませんか？

女 い、いいんですか？

純 はいはい、いいんです。と、僕はいそいそとガスコンロに向かい、またお茶を沸かすことにした。

女 どうですか？（男に）

男 最悪だな。ま、いちおうお茶をいただこうか。

女 あの、あなた、私たちがどういう目的であなたの部屋を訪ねたのか、知ってますか？

純 いいえ。

女 いいえってそんな、無防備な。

男 宗教の勧誘なんですよ。

純 宗教？

男 はい、それも怪しい宗教なんです。たとえば、教祖はM87星雲からやってきた宇宙人で、アダムスキー型の宇宙船に乗って満月の夜にミサを行うような。

純 は？

男 聖書は宇宙語で書かれているから誰にも読めないんだけど、テレパシーで分かるんです。「地球人よ。救われるためには、この、クリプトナイトでできた観音様を買うのだ。今なら半額。一体10万円。」

純 すっげー！と何故か感心してしまうのであった。

女 すっげーって、あなた、そんな事に感心してどうするのよ。

純 だって、たったの10万円で救われるんですよ。ちょっと待って下さい。駅前の無人君に行って10万円借りてきますから。ええと保健証はと……。

女 ちよつと待った！……どうです？（男に）

男 0点だ。（バインダーに大きく書く）

女 やつぱり0点ですよ。今年に入って5千人ほどに面接してますが、初めてですね、0点は。

男 驚くべき若者だ。

純 驚くべき若者って、僕の事ですか？

女 そうよ。ちよつとそこに座りなさい。

純 はい。と、僕はその女に言われたとおりに座る事にした。

女 え？なんですって。誰に向かって解説してるの？

純 ああ、気にしないで下さい。ここ、回想シーンなんですよ。だから。

（間）

女 回想シーンって？

純 だから僕はある大きな事件の当事者で、今、過去を振り返ってるところなんです。

（間）

女 あなた……どんな事件を起こしたの？

純 いや、だからですね。これから起こるんですよ、大きな事件が。

女 ごめんなさい。意味が良くわからないんだけど？

純 ああ、分からなくて当然ですよ。これは僕の回想シーンで、あなたたちは単なる登場人物にすぎないんだから。

女 単なる登場人物って、君。人を学芸会の「陽気な村人A B」みたいに思ってるの？

純 はい。

女 なめとんか、こら！

男 まあまあ、落ち着くんだユウちゃん。

ユウ だって、千石（せんごく）さん。

純 彼らはユウちゃんと千石さんという名前だった。

千石 ……まあ、誰だって自分が主役だって思ってるもんだよ。君だってそうだろ？

自分の人生の中では、自分が主役だと思ってるから、単なる登場人物って言われて腹が立つんだ。

ユウ はあ。

千石 で、君は今、回想シーンを誰かに向かって語っているわけなんだね。

純 はい。

千石 誰に？

純 は？

千石 だから、誰に向かって回想シーンを語ってるんだ？

純 （客席を見て）誰にって……ここらへんに、ウワーツといるでしょう。

千石 ここらへんに、ウワーツと？

純 知ってるくせに。

ユウ 話にならないわ。千石さん帰りましょう。

千石 ああそうだな。帰ろうか。

純 あー！あの、帰らないで下さい！お願いします！

ユウ いいじゃないの、私たちは単なる登場人物なんですよ。陽気な村人A Bなんですよ。

そんな小者いてもいなくてもいいじゃないの。主役の君が、一人でどんどん回想してちょうだい。

純 困るんですよ、それじゃあ。物語には、彩りやエピソードが必要でしょ？

いきなり主役が登場して、メインテーマをべらべらしゃべっても、誰も聞いてくれないですよ。

ユウ 彩って、君。いちいちカチンと来る言い方するわね。

純 あ、お茶、お茶入れますから。僕はあわてていた。

ここで彼らに帰られてしまうと、いきなり結末になってしまうような気がした。あわてたおかげで、1ヶ月前の出がらしが入っている急須にお湯を注いでしまっていた。

まあいいか、わかりやしないだろう、と思った。

ユウ 千石さん。私やっぱり帰りたくなってきました。

千石

でも0点なんだよ。彼をそのままにしておいていいのか？！
彼こそ、私たちをもっとも必要としている若者なんじゃないのか。

ユウ

まあ、そうだとは思いますが・・・。

純

粗茶です。（お茶を出す）

ユウ

ほんとね。

純

で、宗教の勧誘でしたっけ？10万円で救われるんですよね。ははは。

千石

実は、そうじゃないんだよ。怪しい宗教の勧誘に対して、君がどれくらい対応できるか、テストさせてもらったんだよ。

純

テスト？

ユウ

最悪の結果だったわ。

このままじゃ、あなたはさまざまな悪徳宗教や詐欺師たちの餌食になるわ。

純

そんなにひどかったんですか。

ユウ

無茶苦茶よ。

純

どうしよう。

千石

まず、いくつか質問に答えてもらおう。

純

はい。

千石

名前と年齢は？

純

目黒純一郎。二十歳です。

ユウ

純一郎。どうしてそんな「もう終わりました」みたいな名前で生きてるのよ？

純

そんなこと言ったって、僕にはどうしようもないじゃないですか。名前なんだから。

ユウ

純一郎君。あなたひよとして人生のタイミングが悪い人なんじゃない？

純

え？！

ユウ たとえば、友達とか家族で中華料理を食べてるときにね。
みんなが、ああ、もう食べられないって思ってた井を見上げた瞬間に運ばれてくる
餃子3人前みたいな。

純 う、うわー。

ユウ 餃子は悪くないのよ、決して。でもどういうわけかタイミングが最悪なの。

純 そうですよ！餃子のせいじゃないですよ！たまたまそういう順番になっただけじゃないですか。

ユウ そう。でも、何回もそんなことが続くとねえ。

純 続くんですよねー、不思議と。

千石 次。出身地は？

純 北海道の小樽です。

ユウ ああ、田舎ものね。

純 田舎じゃないですよ小樽は。とんでんだってあるし。

ユウ なんなのその、「とんでん」って。

純 え？知らないの？有名なファミレスチェーンとんでんだよ。メニューにウサシチューもあるんだよ。

ユウ 知ってるわけじゃないの、そんなもの。

千石 ユウちゃん先を続けよう。(お茶を飲んでいる)

ユウ はい。北海道から出てきて何年になるの？

純 もうすぐ1年です。

ユウ 職業は？

純 作家。

ユウ 作家？！

純 に、なるんですよ。大きな事故のあと、手記とか書くでしょう、みんな。
だから僕も、手記とか書いてその印税でいい暮らしするわけです。

ユウ 分かったからね、それは。今の職業はなに？

純 いろいろやってるんですがね。主に出版関係の仕事です。

ユウ もっと詳しく言うとは？

純 だから、出版ですよ。宅配ピザのチラシや、韓国エステのチラシをね……。

ユウ 印刷してる。

純 いや、配ってるんです。エレベーターのないマンションは最悪ですね。頭に来てよく2枚づつポストに入れちゃったりして、ははは。

ユウ たまにはゴミ箱に捨てたり？

純 良く知ってますね。雨の日なんかに時々。

ユウ 仲のいい友達の名前を五つ言ってください。

純 ええと……ちよと待ってくださいね。ええと……。

ユウ まだやりますか千石さん？

千石 もういいんじゃないか。(お茶を飲んでる)

ユウ それ、飲んで大丈夫なんですか？

千石 うん。お茶の葉が発酵してて、けっこういけるね。

ユウ へー。(飲んでみる)

純 で、どうなんですか？

千石 何が？

純 今の質問で何か判ったんでしょう？

千石 うん。

純 教えてくれませんか？

千石 教えません。知らないほうがいいでしょう。

純 そんなあ。

千石 あなたには少し勉強してもらわなくちゃいけないようだ。

純 何の勉強ですか？

千石 世の中の。

純 世の中の？

ユウ じゅんちゃん。

純 はい。

ユウ 好きです。あなたのこと。

純 え、ええ？いきなりそんなこと言われても、その、心の準備が。(顔を赤く染める)

ユウ あきれるくらい騙されやすいのね、君は。

千石 ことばを信用しちゃいけない。君はいつも狙われているんだよ。

純 狙われてる？あ、主役だから狙われるんですよね。そうでしょ？

(間)

千石 ま。そう言うことにしとこうか。たとえば誰かが君の部屋のドアをノックしたとするとね？

純 はい。

(扉をノックするやつがいる)

純 あれ？

(ノック。純、立ち上がる)

純 信じられなかった。また運命が扉をノックしている。何かが起こりつつあるんだ、何か。キャンキャンうるさいこの女には帰ってもらって、次の運命に身を任せたほうがいいのかもしれないと思った。

ユウ キャンキャンうるさい？

純 はいはい！ちょっと待ってくださいーい。

(扉を開ける。いきなりクラッカー。女が2人立っている。拍手。)

2人 おめでとーございまーす！

純 え？

女1 当たったんですよ。あなたが当選第1号です。

女2 うっわー。とうとう当たっちゃいましたー。それも大当たりです。

純 あの、何が当たったんですか？

女1 決まってるじゃないですか。この筋肉増強ドリンク「ドーピン3号」のモニターに当選したんです。(渡す)

(拍手)

純 ドーピン3号？

女2 次回北京オリンピックに向けて、北朝鮮当局が極秘裏に研究していた筋肉増強剤。なんと、あのペンギンがこれを飲んで空を飛んだのです。

純 ペンギンが飛んだ！

女1 どんなひ弱な肉体も、このドリンク一本でムキムキだー！

女2 女の子たちの憧れの的。今年の夏のビーチの主役はあなただったのですー！

女1 さ。一気に飲んで見ましょう。

純 主役！やったー。あれ？でも僕は何も申し込んでないけど、どうして当たったんだろう？

女2 わが社専属の風水師、ワンさんがあなたの部屋を指差して「ここが当たりあるよ」といったわけですー。

純 ああ、風水で当たったんだ。で、本当にムキムキになるの？

女1 もちろんですとも。美女を軽々抱き上げて、木から木へ……。

女2 ウッホ、ウッホ、ウッホー。

純 まさに主役。まさにヒーロー。あれ？ウッホーって、ゴリラ？

女2 まちがえた。あくあ、あく。

純 こんなラッキーな事が起こっていいんだらうか。他の人には申し訳ないような気がしたが、ありがたく頂くことにした。いただきまーす。

(ドリンク剤を一気飲み。何も入ってないが。)

純 あれ？なにもはいつてないけど。

女1 あんた、どういうつもり、それ。

純 え？

女2 変な薬が入ってたらどうするのよ。

女1 0点だわ、0点。千石さんたちの怪しい宗教はどうだったんですか？

千石 0点だよ。

女2 やっぱり。君、少しはまじめにやったらどうなの？

純 まじめにやってます。

女1 うそ。わざとボケかましてるようにしか見えないわよ。

ユウちゃん。私もお茶ほしいな。

ユウ はいはい。どうしてそう騙されやすいのかねえ。(お茶を入れる)

純 やっぱり大阪って怖いところなんですわねえ。

女2 あたりまえやん。大阪は日本一の犯罪都市やで。大阪府の人口3000万の半分は詐欺師やん。ぼくはどっからきたん？

女1 北海道の小樽。(ファイルを読んでいる)

女2 ああ、田舎もんか。

純 だから田舎じゃないですよ。とんでんもあるし。

女1 目黒純一郎。二十歳。仕事はポスティングのアルバイトで友達はゼロかあ。

ユウ はいお茶。アケミは発酵したお茶大丈夫？

女1 うん。ウーロン茶とかでしょ。シゲミも好きだよね。

女2 いただきますーす。

純 その女たちはアケミとシゲミと言う名前だった。

アケミ ちよっとあんだ。誰に向かってしゃべってるの？

ユウ 実はね。純ちゃんは今、回想中なの。

大事件の当事者である彼は、過去の出来事を回想してるってわけなのよ。

シゲミ うっそー。おもしろそう。

ユウ でもねえ。大事件にはなりそうもないわよね。

アケミ どうして？

ユウ だって、重みってものがないでしょ。

純 重み？なんですかそれ。

ユウ 大事件の当事者には、それなりの過去とかがあるわけでしょ。

シゲミ ああ、そりゃそうよね。抗うことの出来ない数奇な運命に弄ばれたりしてね。

アケミ その過去の重みが、主人公の表情とか話し方ににじみ出るってわけね。

(みんなで純を見る)

純 な、ないですか、重み。

シゲミ かけらもないわ。

ユウ だいいち、大事件に行きつく前に、詐欺師達にコロコロ騙されて消費者センターに駆け込んだりしそうじゃない？

みんな うんうん。

純 だからですね。今は重みがなくても、これから重みが出てくるんですよ。

アケミ でも、どれくらいかかるのかなあ、主人公らしい重みがでるまでに。

ユウ まあ、十年や二十年はかかるわよね。

純 そ、そんなにかかってたら、結婚とかして子供もできちゃったりして、身動きとれなくなってますよ。

シゲミ 結婚して子供？！やっぱり小者の言うことは違うわね。

アケミ 純ちゃん。いいじゃないのそれで。結婚して、子供ポロポロ作って、「貧しいけれど楽しい我が家」を目指しましょうよ。

純 いやですよ、そんな。主役なんですよ、僕は。

ユウ サザエさんだって主役よ。

純 それだけは勘弁してください。まだ二十歳なんですよ。今から磯野家を目指すなんて、さびしすぎます。なんとかならないでしょうか。3日くらいで重みが出るような薬とか・・・

シゲミ こりやだめだ。また騙されるわね。

ユウ どうします？千石さん。

千石 この機械はなんだろう。

純 ああ、それは作りかけの時限爆弾です。

(間)

純 あ。あの、違うんです。これを使って事件を起こすとか、そういうことじゃないんです。これはただの趣味で作ってるだけなんです。

アケミ 趣味？爆弾が？

純 爆弾が趣味なんじゃなくて、爆弾を作るのが趣味なんですよ。ほら、このページにね、時限爆弾の作り方が載ってるんです。ほらほら。

シゲミ 「ハラハラドキドキ手作り爆弾でお楽しみ会。単調な生活に飽き飽きしたあなた、いじめでむしゃくしゃしてるあなた、倦怠期をむかえた熟年夫婦のあなた、ちよっとした不注意でなにかもがキャンセルできます。でも、本当に作るときは自己責任でね、ウフ。」

純 ね。

ユウ それで、その爆弾はもう出来上がってるの？

純 あともう少しのところなんですけど、まだなんです。

赤いコードをフィラメントに、青いコードをニトログリセリンに繋がなくちゃいけないですよ

千石 ああ、簡単だよ、これとこれを、こことここに繋ぐわけね。こんな風に・・・

純 わー!!!!

それ、逆じゃないかな。赤と青を逆に繋ぐと、命がなくなるらしいんですよー。

みんな えー……。

千石 本当にハラハラドキドキだね。ちよつとこつちに置いてごうか。

純 そつとおいてくださいね。そーつとね。

千石 うん。そーつとね。あ……。

(落とす)

みんな わー！！

(伏せる。間)

千石 びっくりしたー。

ユウ せ、千石さん。気を付けてくださいよ。

千石 ごめんごめん。手がすべっちゃってね。(爆弾は持っている)

(誰かがドアを激しくたたく。みんなドアを注目)

純 お、おお！まただ、また運命が扉をノックしていた。僕はわくわくしながら扉を明けようとした。しかしまてよ。騙されちゃいけない。今度こそ騙されないようにしようと思った。

はいはい。

(純がドアを明けるとすごいのが立っている。男なのにメイドの服を着て、カチューシャ。しかもコーヒーかなんかが乗ったお盆まで持っている。だが、怒ってるようだ)

メイド ちよつと！今何時だと思ってるのよ！

純 ええと、何時でしたっけ？(ユウに)

ユウ 時間が知りたいの？

純 はい、この人が何時かなって。

メイド そうじゃない！時間を知りたいから来てるんじゃないぞ！

純 わかりましたよ。そのコーヒーでまた私を騙すつもりなんでしょう？でも、いりません。コーヒーは嫌いなんです。帰ってください。

メイド 違います！これは練習用のコーヒーカップ。中身は入ってませんよーだ。

千石 練習用？

メイド とにかく静かにしてください。いいですか？ここはアパートなんですよ。今までみんなでひっそりと暮らしてきたんです。そうでしよう？

隣にどんな人が住んで、何を練習してようが知らん振りですよ。もちろんどんな危険なものを持ってても、無視して・・・(千石の持っている爆弾を発見) あれ？

アケミ なんかすごいのが出てきますけど。どうします？

千石 そうだな。すごいのが出てきちゃってるな。

メイド それ、すごいんでしょう。ハラハラドキドキ手作り爆弾。

破壊力はTNT火薬で1キログラム相当。半径10メートルは吹き飛ばんでしよう？
現物を見るのは始めてだけど、けっこう小さいんですね・・・やるんですか？

千石 なにを？

メイド さあ、それは知らないけど、何か大きなものを吹き飛ばすんでしよう？

千石 これってそんなにすごいのか？さつき手が滑って落つことしちゃったけど。

メイド 落つことしたー！！！！ハーハー(息が荒い) 気を付けてくださいね。
僕はこれで失礼しますけど。

ユウ ちょっと待ちなさい。千石さん、いいんですか彼をこのまま帰して。

千石・メイド え？

メイド ……いや、誰にも言いませんよ。もちろん警察に通報したりしません。
爆弾の事はきれいさっぱり忘れれます。ほんとです。だから、助けてください。

ユウ いいえ、わたしは許せません・・・やっちゃいましょう。

千石 やっちゃうの？

(メイドはアケミとシゲミに引ッ立てられる)

メイド ちょっと待って下さい。ああ、ひどすぎますわ。何をなさるの！？ああーれー！

ユウ やめなさい！その言葉使い。虫唾が、虫唾が走るじゃないの。

メイド むしずって？虫の複数形ですか？

ユウ 違います。ことばも知らないようね。シゲミ、第1問。

シゲミ これもきつと0点よ。はい、ここに魑魅魍魎って書いてみて。

メイド はい？ちみ？えーと・・・(書く)

アケミ ひらがなで書いてる！

シゲミ しかも、まちがえて「ちちもうりよう」って書いてる。

ユウ まさかとは思うけど、その服で外出してるんじゃないでしょうね。

メイド まさか。これは部屋着ですよ。こんな恥ずかしい格好で外は歩けませんでしょう。

ユウ はずかしいという認識はあるみたいね。

メイド はい。恥ずかしいから余計に、一人のときに、萌えます。

ユウ こ、こいつ、ひとりでなにをやってんだ？

メイド ひみつ。

ユウ 千石さん。こっちにしましょう。(メイドを指差して)

千石 これにするのか？

アケミ このまま放置できませんよ。

シゲミ 大嫌いなタイプなんですけど、何かは、やってくれそうですし。

純 あれ？あれあれあれ。じゃあ、僕はどうなるんですか？ちよつとちよとー。

メイド あの。なにがどうなってるんですか？

ユウ 選ばれました。あなたが選ばれたんです。そして、あなたは選ばれなかった。ただそれだけです。

メイド やったー！なんか、選ばれたって言われると、素直にうれしい。

アケミ あ、やっぱりうれしいんだ。最低だな。ははは(盛り上げる)

シゲミ よーし、君の部屋に行って続きをやろう。(盛り上げる)

メイド えー？！いいんですか、そんなことしてもらっちゃって。まあ、コスチュームは
いっぱいありますけどね。ははは。

ユウ 完全に勘違いしてるようだな。ははは。(盛り上げる)

メイド あ。じゃあお客様が3人つてことですね。椅子がたりないなあ。ははは。

アケミ ほらほら、まったく分かってない。

(大爆笑。4人去る)

千石 これ、ここに置いてくから。(爆弾をテーブルに)

純 何が悪かったんでしようか。

千石 うん。別に悪いところはなかったよ。

純 重みでしようか、重みが足りなかったんでしようか。

千石 いや、君は二十歳なんだから、重みなんてなくて当たり前だよ。ただね。

純 なんですか。

千石 ナズがない。

純 ナズ？

千石 うん。ナズが深みを作るんだ。たとえば、さっき私はタイミングを見計らって

「この機械はなんだろう」って言ったんだよ。すると君は……。

純 ああ、それは作りかけの時限爆弾です。

千石 みんな、驚いた。ね。ただの田舎者だと思ってた男が、爆弾を作ってたんだもん。

何かあるんじゃないかって考えるじゃないか。何か込み入った過去があるんじゃないかって。

純 はい。

千石 とてもよかったよ。私も感心したよ。でもそのあと、君はペラペラしゃべりだした。

聞かれてもないのに、爆弾作りは趣味だとか……。

純 しゃべりすぎて、ナズがなくなったわけですか。

千石 うん。やっぱりただの小者なんだって感じたんだよ、みんな。

純 ナズがないから、深みもなかったんですね。

千石 なかったね。

純 主役はむりでしょうか？

千石 無理って君・・・私が演出家なら、君にこう言うね。

「磨かれてもない石がひかるわけない」って。

ユウ(声) 千石さーん。コスチュームどれにしますー？

千石 ……期待してるよ。(ユウに) え？私も着替えるのか？！

(千石、去る。純は爆弾をかかえて呆然)

純 赤いコードはフィラメント。青いコードはニトログリセリン。

(隣の部屋から声が聞こえる。千石・こんなものに着替えるって言うのか？ひどすぎるぞ。

シゲミ・千石さん似合ってるー。(みんな爆笑) メイド・こんなものもあります。どっちにします？

千石・二択かよ。メイド・これ。本物ですよ。実は楽屋に忍び込んでね。ひひひ。

アケミ・キヤー。犯罪行為じゃないの。わたしがもらつときます。ユウ・こらこら。サイズが合いません。アケミ・ぎゃふん。シゲミ・ぎゃふんって、始めて見たわ、そんなこと言う人。

(みんな爆笑)

純 僕はじっと待つことにした。今までどおりじっと待つことに。

だってそれ以外に僕に何が出来たって言うんだ？重みやナゾや深み・・・。

僕の中のどこかにあつてほしかった。でも、どこにもないんだらうなあ。

もう遅いから寝る事にした。また明日に期待しようと思って、僕は立ち上がった。

と、そのとき。

(女がドアをバンと開けて入ってくる。酔っ払いである。)

ナミエ ただいまー。

純 お帰りー。

ナミエ ん？あんた誰？

純 あ、あなたこそ誰なんですか。

ナミエ ナミエよ。

純 ナミヘイさん。

ナミエ ナミエ。ナミヘイじゃサザエさんとこのオヤジじゃねえか。水、水ちようだい。

純 は、はい。(水を汲みに行く)

ナミエ その日も私はへべれけだった。部屋に帰ってみると見知らぬ男が私を待っていた。ぴんときた。あいつだ。とうとうあいつが姿を見せたってわけだ。

純 女に見覚えはなかったが、仕方なく水を汲んでやった。どうせ、酔っ払って部屋を間違えたって事なんだろうと思った。はい、水。

ナミエ ありがとう。ん？おい、なんかにごってるよー。何か入れたんじゃねえだろうな。何も入れてませんよ。ただの水です。それ飲んだら帰ってくださいね。

ナミエ お。帰れだど？幽霊のくせにえらそうな口たたたくじゃねえか。(水を飲む)

純 幽霊？ぼくが？

ナミエ 知ってたんだぞ。お前いつもその流し台のところ立って、私のこと見てただろう。

純 見てませんよ。

ナミエ そういうのを、・・・スモーカーって言うんだぞ。知ってっか？

純 ストーカー。

ナミエ そう。それ。お前、じゃあ、知っててやってたんだな。自分がスモーカーだって知っててやってたんだ。

純 だからね・・・。待てよ。そのとき、僕の頭の中でナズと言う単語と、幽霊と言う単語がガツチャンとつながった。幽霊だとかかなりナズがあるんじゃないだろうか。

ナミエ 何ぶつぶつ言ってた？今から着替えるからあっち向いてろ。

純 え？着替えるんですか？

ナミエ 当たり前だろ。このまま寝たりしたらスーツがしわしわになっただろ。あっち向いてろ。

純 は、はい。(あっち向く)

ナミエ (引き出しからネグリジェをとりだす) なんとなく落ち着かなかったが仕方ない。相手は幽霊だから何を見られても平気だって事にしよう。

私はブラウスのボタンとスカートとホックを苦労してはずすと、バーンと衣類を投げ捨て、あられもない格好になった。あられもない・・・おい、お前。

純 は？

ナミエ じつとそっち向いてるけど、興味ないのか？

純 何にですか？

ナミエ 私のあられもない格好に。

純 ぜ・いや、少しは・・・。

ナミエ じゃあ、自分の欲望に素直に従ったらどうなんだ？

純 い、いいんですか？

ナミエ いいも何も、いつも見てんだらう。

純 じゃ、ちよつとだけ。(ふりむく)

ナミエ あー！なんてやつだ！（ネグリジエを投げつける）

純 あー。また騙されたー。

ナミエ お前、幽霊の中でも最低のやつだな。やめたやめた。今日は着替えるのやめとこう。ラーメンかなんか作ってくれ。

純 え？ラーメンを僕が？

ナミエ だっておなかすいちやってんだよ。そこ、その戸棚の中に「麵屋佐吉・しょうゆ味」が入ってるからさ。

純 えー？ここに？（本当に入ってる）不思議だった。本当に麵屋佐吉が入っていた。それにこの恥ずかしいパジャマはなんだ？こんなものがどうして僕の部屋にあったんだらう？

ナミエ お湯。

純 え？

ナミエ お湯沸かさなきゃ出来ないだろ？

純 はいはい。(ガスコンロに火をつける) あのう。変なこと聞いていいですか？

ナミエ 変な事？エッチな質問か？

純 そうじゃなくて、僕って本当に幽霊なんでしょうか？

ナミエ それは本当に変な質問だった。幽霊が私に向かって、自分は幽霊か、と尋ねたのだった。きっと実感がわかないのだろう。無理もない。死は突然訪れるからだ。私はそのかわいそうな幽霊にやさしく言ってやった。ゆ・う・れ・い・だ・よ！

純　なんか変だなあって思ってたんですけど、僕はこの部屋でじっと何かを待っていたんです。何かは分からないんだけど、じっと待っていて・・・

ナミエ　私を待ってたんだよ、きつと。

純　あなたを？

ナミエ　他に誰を待ってたんだ？ここは私の部屋だよ。

純　でも、ナミエさんでしたよね・・・見覚えないんだけどなあ。

ナミエ　私だってあんたの事なんか知らないよ。

純　じゃあどうして僕がナミエさんを待ってるんですか？

ナミエ　あのみさ。「ナミエ」って呼んでくれる？「ナミエさん」って言うと、なんか「ナミヘイさん」に聞こえちゃうのよね。

純　ナミエ。

ナミエ　なーに、純ちゃん。

純　・・・どうして僕の名前を知ってるんですか？

ナミエ　やっぱりあなた「目黒純一郎」って名前なのね。

純　そ、そうです。

ナミエ　私がこの部屋に引っ越してきたとき、下駄箱にそう書いてあったのよ。毛筆できちんと「目黒純一郎」って。目立ってたわ。だから私、もっと年寄りだと思ってたんだけど、けっこう若かったのね。

純　はい。二十歳ですから。

ナミエ　二十歳だった。

純　はい。二十歳だったというべきかも知れないですね。

ナミエ　で、何があったの？

純　さあ。

ナミエ　さあって、あんた。幽霊になるくらいなんだから、なにかあったんでしょう？ほれ、話してみな。

純　それが、覚えてないんですよ。いきなりこうなってる・・・。

ナミエ　なんだって？じゃあどうして幽霊になんかなってんだ？意味ないじゃないか。

純　意味ない？

ナミエ　そ。居ても居なくても一緒じゃないか。

純　そんなあ。

ナミエ　お湯、沸いてるよ。

純　あ、はいはい。(佐吉を作る)

ナミエ　困っちゃうなあ。脇役はちゃんとした目的を持って出てきてもらわなくちゃ、混乱するじゃないか。

純　混乱、しますか。

ナミエ　だってそうだろう？映画だってドラマだって、脇役は一言でまとめられるもんだよ。

「印刷屋のたこ社長」とか「どじなノリスケおじさん」とか。でも、「いてもいなくてもいい幽霊」じゃ脇役としての単純さに欠けてるよ。

純　あの。脇役って・・・僕の事ですか？

ナミエ　そう。仕方ないから、ラーメン作ったら出ていってくれる？

純　ちょっと待ってくださいよ。僕が出ていたら誰が主役をやるんですか？

ナミエ　主役はちゃんと居るから、安心して出てっついでいいよ。

純　そ、そんなばかな。だってこれは僕の回想シーンなのに。

ナミエ　幽霊は、自分の回想シーンだと信じてるようだった。やっぱりこの世に未練があるんだろう。かわいそうに。成仏してもらうためには、少しエピソードのようなものが必要なんだろうか。仕方ない。私も少し協力することにした。

純　麺は柔らかいほうがいいですか？それとも固めがいいですか？

ナミエ　どうでもいいじゃないかそんなこと。

純　だって、好みがあるでしょう？

ナミエ　ラーメン屋か、あんた。主役はそういう細かい事を気にしないもんなだよ。

純 はあ。そうなんですか。

ナミエ そう。主役はもつとでつかい目標に向かってグイグイ進むもんだよ。あれ？
なんだ？この機械は。

純 ああ、それは作りかけの時限爆弾です。

(間)

純 ナゾ。ナゾ。ナゾ。ナゾ。

ナミエ な、なんでこんなもの作ってるの、あんた。

純 実は、込み入った過去があるんですよ。

ナミエ 込み入った過去？どんな？

純 今は、言えないんですよ。時期が来たら話せると思うんですけどね、はは。

ナミエ ふーん。それで、この爆弾はもう完成してるわけ？

純 ほぼ完成です。あとは、この赤いコードをフィラメントに。
青いコードをニトログリセリンに繋げばいいだけです。

ナミエ あんた、誰かを殺るつもりなんだ。

純 ……はい。

ナミエ 怨念。そうでしょ。

純 ……はい。

ナミエ やるじゃないの、純ちゃん。それでこそ幽霊だよ。

純 ははは。そうですか。

ナミエ その爆弾で、私を殺るつもりなんだ。

純 え？

ナミエ 分かってるって。私、なんか狙われやすい性格なんだよ。
気づかないうちに誰かを傷つけたり、踏みつけにしたりしてるらしいんだ、それで。

純 あの…。

ナミエ あー！分かった！分かったよ。今思い出した。昨日私、酷いことしたんだよ。

純 僕にですか？

ナミエ そうか、あれがあんただったのか。

純 何かあったんですか？

ナミエ 私、酔っ払ってたんだ。ごめん、悪かったよ。

純 でも、昨日も僕は、いつもどうりラーメンを食べて・・・

ナミエ そう。あんたはいつもどうり、私の食べ残したラーメンを食べていた。

純 ナミエの食べ残しを？

ナミエ そのとき私はちよつと気が立っていた。あんたがラーメンをぺちやぺちやと食べている姿を見て、ムカツときたんだ。つい、玄関においてあったスリッパ・・・そう、このスリッパをつかんで思いつきりあんたの頭を・・・パーン！（なぐる）

純 いて！

ナミエ それだけじゃないの。弱ったあなたに台所用の合成洗剤をワーツとかけて・・・。

純 えー？

ナミエ おまけにその上から熱湯を・・・。

純 熱湯を！

ナミエ ・・・・あんたはどうとう動かなくなった。

私はハーハーと荒い息をしながら、割り箸であんたの死体をつまむとビニール袋に入れて、ゴミ箱に・・・。

純 なんですか、それ・・・あ。ゴキブリ？

ナミエ ごめん、本当に悪かった。あんたはただのゴキブリじゃなかったんだ。ゴキブリに変身した純一郎だったんだ！オウノウ！

純 そんな馬鹿な事があるわけじゃないでしょう。

ナミエ いや。あったのよ、昔。カフカって外国人が、本にも書いてんだよ。主人公が何か気がかりな夢から目覚めると、虫になってたらしいんだよ。

純 じゃあ僕は、ゴキブリの幽霊なんですかー？

ナミエ 台所から、じっと私を見つめるネットリとした視線。あれは、ゴキブリ純一郎が、鍋やフライパンの陰からじっと私を見ていたからだだったんだ。

純 ……もしもそれが本当なら、僕って、悲惨なやつですよ。ゴキでしかも幽霊でしょ。

ナミエ そうじゃないよ。虫に変身したグレゴリー・ザムザは主役だよ。それも純文学の主役なんだよ。

純 純文学？なんですかそれ。

ナミエ 本も読まないのかあんだ。まさか、あんだが考えてる主役って……

純 ヒロインの女の子を助けるために、深い海の中に潜っていくんですよ。深みですね。そして、ピンチに次ぐピンチ。ホオジロザメや大王イカとバトルを繰り広げてですね。

ナミエ 浮かばれないね。

純 え？

ナミエ 子供がやるゲームだぞ、それじゃあ。

純 やっぱり純文学のほうが大人で、重みやナゾや深みがありますか？

ナミエ 当たり前だろ。重みやナゾや深みだけじゃなく、渋みもあるよ。

純 渋みも？いろいろあるんですねえ。

ナミエ な。虫でいいじゃないか虫で。しかも虫の前は純一郎で、今はその幽霊だぞ。このあたりで客の半分くらいは置いてきぼりさ。

純 え？！置いてきぼりじゃ困るんじゃないですか？

ナミエ いいんだよ、純文学なんだから。終わったあと「良くわかりませんでした」っていわれるくらいがちょうどいいんだよ。

純 はあ。けっこう簡単なんですわね、純文学って。僕、それやってみます。なんかやる気出てきましたよ。

ナミエ よし。じゃあ、がんばるんだよ。

純 はい！

ナミエ ラーメンは？

純 出てます。胡椒とかどうしますか？

ナミエ は？

純 と、細かい事はどうでもいいんですかね。

ナミエ いただきます。

純 おありがとうございます。

ナミエ (一口食べて) うっ！うーっ！

純 え？

ナミエ 純。ほ。本気で私を……うっ、うー。

純 ど、どうしたんですかナミエ。

ナミエ 私、あなたの事を……甘く見てた。私の負けだわ……ガク。

(と、倒れる。誰かがドアをどんとたたく)

純 どうしよう。し、死んだのかな。ナミエ、ナミエ……。僕はただラーメンを作っただけなのに。

(ドアをバンバンたたく音)

千石(声) 純一郎君！どうしたんだね。

純 は、はいー！

千石(声) 扉を明けてくれ！

純 ちょっと待ってください。なんか今、取り込んでましてですね。

ユウ(声) 千石さん。鍵は開いています。踏み込みましょう。

(バーンと踏み込んだのは、4匹のゴキブリ。)

純 わー！なんなんですか！その格好は。

千石 何があったんだ、純一郎くん。

ユウ あ！ここに人が倒れています！

シゲミ し、死んでるようですね。

アケミ ここに、食べかけのラーメンがあるわ！

ユウ 毒殺……。

(間)

千石 君が、殺ったのか。

純 はい。どうもそうらしいんですが……もうちょっと離れてください。くっつかないで下さい。

ユウ 事件よ。とうとう事件が起こったのよ。

千石 この奇怪な事件に我々は驚いた。しかし、この後、あんな事が起こるだなんて、そのときの我々は知る由もなかったのであった。

(曲。純に照明。それとともに部屋の壁が後退して行き、けっこう大きなスペースになる。もちろん、ゴキブリたちが動かしているのである。主人公の独白の場面である)

純 ……あれ。ちよつとー。壁が動いちゃってますよ。あれれー。

ユウ はいカット。なにやつてるのよ、あなた！

純 何って、壁が動いちゃってて、びっく……り……。

シゲミ 狭すぎるでしょう、あのままじゃ。ここに今6人もいて、そのうち4人は着膨れてるのよ。身動き取れないじゃないの。

アケミ そうよ。狭いから広げちゃう。何が悪いのよ。君は気にせずに続ければいいのよ。

千石 よーし。さっきのところからもう一度やるよー。

みんな はーい。

(部屋を元に戻す。)

ユウ じゃ行きます。事件よ、とうとう事件が起こったのよ。

千石 しかし、この後、あんな事が起こるだなんて、そのときの我々は知る由もなかったのであった。

(曲。純に照明。それとともに部屋の壁が後退して行き、けっこう大きなスペースになる。もちろん、ゴキブリたちが動かしているのである。主人公の独白の場面である)

純 あの・・えー？

ユウ（小声） 「え？」じゃないでしょう。ここよ、ここ。ここで純一郎が過去を回想するんじゃないの。

シゲミ（小声） そうよ。ここで回想しないでどこで回想すんのよ！ほれ、何でもいいからしゃべれ！

純 えーと。・・・ある朝、何か気がかりな夢から目覚めると、僕は、虫になっていた。

アケミ（小声） カフカ？、カフカ？

純 小樽から大阪にやっできて1年が経とうとしていた。

仕事は、チラシをマンションやアパートに配るポスティングで、その単調さに飽き飽きしていた。いつも僕は一人ぼっちだった。でも、それでさびしいとか、人恋しいとか感じた事は一度もなかった。でも、何故か僕はひっそりと虫になっていた。

ユウ（小声） けっこういいですよね、千石さん。

千石（小声） うん。

純 気がつくと僕の部屋には、女が住んでいた。名前はナミエと言った。

毎日昼ころ出勤し、夜遅く帰ってくる彼女は、毎晩酔っ払っていた。

そして、決まって夜食にカップラーメンを食べた。

台所は荒れていたが、おかげで僕は飢えることなく生きていけた。

事件はある日突然起こった。

いつものように、ナミエの食べ残したカップを長い触角で探り当てた僕は、

ぺちやぺちやと食事をしていた。そして彼女と初めて目があつた。

ナミエの目が大きく見開かれていた。僕はどうしてだか、動けなかった。

彼女がスリッパを大きく振りかぶったところで・・・意識がなくなった。

千石 そのあときつと、洗剤をふりかけ、熱湯を浴びせたんだ。

ユウ ええ、人間のやる事はみんな同じです。

純 幽霊になってたんです。僕は、幽霊になってて、そんなつもりはなかったんだけど、

彼女のカップラーメンに、ニトログリセリンを・・・。

シゲミ ニトログリセリンを？

千石 血管が拡張し、意識がなくなる。致死量は5mgだよ。

純 いや。そんなつもりはなかったと言ったのは、うそです。

彼女が僕の事を、脇役だと言ったのが心にひっかかって・・・

ユウ このままじゃ、主役の座を奪われるんじゃないかと思った。

純 はい。

千石 良く話してくれた、純一郎君。(純の肩に手を回す)

純 さ！触らないで下さい！僕、ゴキブリは嫌いなんです。大阪に来た次の日だったかな。台所をチヨロチヨロする茶色い虫を始めて見たんです。もう北海道に帰ろうかと思いましたよ。

アケミ え？北海道にはいないの？

純 いませんよ。当たり前じゃないですか。

千石 ま、いないだろうな、こんなでかいやつは。

純 小さいのもないんです。なにやってるんですかあなた達は。

千石 何って、ゴキブリだよ。

純 だから、どうしてゴキブリの格好してるんですか。遊園地のキャラクターシヨウじゃないんですよ。

千石 遊園地のキャラクターシヨウ？

ユウ はい。よいこのみなさん、こんにちわー。ゴキブリシヨウのはじまりです。まず、かわいいゴキちゃん達を紹介しまーす。(拍手)

シゲミ 脂っこい食べ物が大好きです。シゲミゴキです。よろしくー。(拍手)

アケミ あたし、きれい好きなのー。お風呂代わりに、あなたの家のてんぷら油に浸かっていますかー。アケミゴキです。よろしくー。(拍手)

千石 病原菌も持ってまーす。センゴキです。よろしくー。(拍手)

ユウ そしてわたし。部屋中飛び回るためにダイエットに励んでいます。ユウゴキですよろしくー。(拍手)

千石 誰がこんなシヨウをよろこぶんだ？

純 ・・・あの。僕は今、純文学を目指して努力してるんです。お願いしますよ。チャチャ入れないで下さい。

ユウ 純文学？！

純 だから、このナミエって人が・・・あ。

(ふと見ると、どさくさに紛れてナミエは起き上がり、ラーメンを食べている)

ナミエ あ。

純 緊張感ゼロ。ただラーメン食べる。

ナミエ でもさつき、純ちゃんは驚いてました。顔が青くなってたもん。

ユウ ほんとに騙されやすいんだから。

シゲミ あのね、千石さん。ここまでの話を整理してみましようか？だんだん難しくなってきましたし。

ナミエ 全然難しくないって。純ちゃんは虫に変身したあと、私に殴り殺されて幽霊になって私に復讐する。

アケミ 十分理解不能です。

千石 かなりの人々を置いてきぼりにするだろうなあ。この後、ゴキ達のパーティーで踊るんだろう？

純 踊る？

千石 ああ、ナミエに復讐した幽霊ゴキの純一郎は、正にゴキ達のヒーローだからな。

純 たくさんのゴキブリに囲まれてサンバかなんかを踊るんですか？！

ユウ ヒーローの勝利のダンス。もちろんヒロインも登場し、甘いラブロマンスへと発展するんです。

純 もちろんゴキですよねヒロインって。彼女とチューとか？（ユウと見つめあう）

千石 いや、チューだけじゃないよ。もっとすごい事もするんだよ。R18指定だからね。

純 もっと？！・・・（倒れる）

みんな あー。

シゲミ 無理です。千石さんやっぱこれは無理ですよ。

アケミ 誰も見てくださいません。絶対。

千石 いや、誰も見てなくてもいいんだよ。純一郎が納得できればね。

純 納得できません。できるわけ無いじゃないですか。

千石 あ、そう。

ナミエ わかりました。でも他にこの配役でどんなドラマが出来るっていうんですか？

純 もっと普通の人はいないんですか。ふつうのえびちゃんとか、ふつうの「 とか。

シゲミ それ普通じゃないし。

千石 いや、登場人物は決まってるんだよ。今日、純一郎の部屋を訪れる人々だからね。

①宗教の勧誘。②酔っ払って良く部屋を間違える女。③隣に住むコスプレ男④ゴキブリ
これ以外は出せないんだよ。

純 ひゃー。厳しいですねそれだけじゃ。

千石 だろ？苦勞してんだよ私達も。

純 あの。ひとつ聞いていいですか？

アケミ はい。

純 あなた達は、どうしてこんな夜遅くまで、僕に付き合ってくれてるんですか？

アケミ 純ちゃんの事が好きだから。

純 あ、ああ。

ユウ 騙されてるよ、何回も言わせないで。

純 すみません。なんでこう、いろいろと面倒見てくれるんですか。

千石 まあ、いいじゃないかそんな事はどうでも。

純 どうでもよくないでしょう。気になりますよ。

千石 気にしないでおう。今を、楽しもうじゃないか。

純 はあ。まあ、僕は・・・けっこう楽しい・・・ですけど。

みんな おー。

シゲミ 純ちゃん。これからもずっと楽しみましょうよ。

純 はい。ずっとって、いつまでですか？

ユウ 君が死ぬまでずっと。

純 え？何十年もずっとですかー？

千石 いや、そんなには長くないよ。

純 ……え？

千石 かなり、短いね。

純 そう…なんですか。

千石 ただね、時間を長いと感じるか、短いと感じるかは、人によって違うだろう。

ユウ そう。同じ5分でも、車輪のトラブルで胴体着陸を試みるパイロットの感じる5分間と、ふと気がつくとき「世界丸見えテレビ」を見ていた5分間とはまったく違うでしょう？

アケミ ドキドキしながら彼を待つ5分間と、いつも引つかかる開かずの踏み切りの5分間とか。

シゲミ たい焼きが焼けるまでの5分間と、たこ焼きが焼けるまでの5分間とか。

ナミエ カップうどんを待つ5分間と、冷凍うどんを煮るための5分間とか。

千石 な。

純 なって…けっこう微妙なものありましたけど。

千石 大事なのは、時計で測る時間じゃないだろう？

純 まあ、そうですが…5分間で何か起こって僕は死ぬって事ですか？

千石 これは君の回想シーンなんだろう？

純 はい。

千石 じゃあ、事件はもう起こってるんじゃないかな。何かが起こってしまっていて、君はそこで立ち止まって過去を回想している。そうだろう？

純 何が起こったんでしょうか？

千石 今までの話だと、これじゃないか。

純 ハラハラドキドキ手作り爆弾。

ユウ 赤いコードをニトログリセリン。青いコードをフィラメントに繋ぐ。

純 赤いコードをニトログリセリン。青いコードをフィラメントに…逆じゃなかったかな。

アケミ 間違えちゃったんじゃないかな？

純 間違えるわけじゃないですよ。ちゃんと覚えてるし。

シゲミ 人間だし、間違える事だってあるわよ。

純 いや、あり得ないですそんなこと。

ナミエ 大きな事件や事故って、ほんのちよつとした弾みで起こるものなのよ。

千石 どうでもいいじゃないか、そんなこと。もう起こっちゃってるんだから。そんなことより楽しい回想シーンの続きをやろう。な。

純 はい……。

ユウ あらあら、暗くなっちゃってるじゃないの。ほら、元気出して！

純 どうもすみません。僕のために皆さんに迷惑かけてしまつて。

アケミ 主役だろ？純ちゃん。

シゲミ そう、主役がそんなこと言っちゃ駄目だわ。脇役達を踏みつけにして、のし上がらなくちゃ。

ナミエ さあ。ゴキブリ達と勝利のダンスを踊りましょう。

純 あの。

ユウ これ、脱いじゃ駄目ですかね。

アケミ 脱ぎたいです、私は似合ってないし。

シゲミ 私はって、アケミ。まるで他の人は似合ってるみたいじゃないの。

千石 分かった。脱ごうか。脱いで初めっからやりなおしちやおう。少々時間は無駄になるけど仕方ないか。

純 ちよつと待つてください。やり直すと時間がなくなるっていいました？

ナミエ そうよ。半分以上は無駄になるんじゃないかな。もうかなりやつてるし。

ユウ いや、そうじゃないの。時間は時計で測ってるわけじゃないからね。純ちゃんのがんばりで、いくらでも伸ばしていけるかもしれないのよ。

千石 うん。まあ、いつかは終わりのときが来るけどね。

純 ……いきなり、終わりになることもあるんですか？

ユウ そうならないようにがんばってるわけよ。さあ、早く着替えましょう。

純 ちょっと待ってください！……やります！やらせてください！このゴキ達と……回想します。

千石 いいのか、これで。

純 ……はい。

アケミ 純ちゃん。君は、純真無垢な北海道の生まれなんですよ。

シゲミ 北海道出身の人って、これをクワガタムシと勘違いしたりするくらいなんですよ。

ナミエ 二十歳になって始めて見て、人生が変わるような衝撃を受けたんですよ。

ユウ とつても無理。やめときましょう。

純 主役は……相手役を、選びません。主役は、いつもチャレンジャーなんですから。

みんな ……(ゆっくり拍手)

千石 純一郎君。今、私は、久しぶりに感動している。

ユウ 純ちゃん……すきです。

純 う……。

アケミ このあたりは、まだまだだね。

シゲミ そうね。

純 本当にまだまだです。でも僕は、主人公になりたいんです。

せめて、回想している過去の物語の中では、自分が主役でいたいんです。だってそうでしょう。現実には、主人公とは程遠い生活をして、

なんだか分からないうちに死んでしまったんだから。ただね、そのためには僕の中に何かが必要なんです。

誰かに主役にしてもらうんじゃないく、自分から何かを掴んでそうなりたいんです。その時間は……まだありますか？

千石 よし。純一郎君。我々が何とかしよう。

ユウ 千石さん。

千石　まず、残り時間を確かめてみよう。

ナミエ　どうやって確かめるんですか？時間の長さは純ちゃんの主観なんでしょう？

千石　それはそうだが、ハラハラドキドキ手作り爆弾は時限爆弾なんだろう？

純　はい。

千石　時限爆弾の時計が、残り時間を教えてくれるさ。

アケミ　時計が？

千石　この爆弾が爆発したときに、一番最初に気づいて駆けつけたのは誰だろう。そいつが最後の登場人物だよ。

シゲミ　それは・・・あ！隣に住んでる変態ですよ、きっと。

ユウ　コスプレ男と呼ぶ事にしましょう。

千石　純一郎君。今までに、彼が君の部屋を訪ねてきたことは？

純　一度もありません。もし来てたら引越しました。

千石　間違いない。爆発音に驚いた「やつ」が、このドアを激しくノックする。それが終了の合図だよ。

ナミエ　とすると、そのコスプレ男が導火線なわけね。

ユウ　ちろちろと萌えながら、ゆっくりと近づき、いきなりそのドアをノックするのは、運命のように。ババババン、ババババンと。

千石　今どのあたりか見てみよう。

みんな　はい。

（正面のパネルを動かして見ると、コスプレ男が盗み聞きしていた）

メイド　あ。

千石　閉めて。（閉める）

純　もうそこまで来てるじゃないですか！

千石　いや、今のは段取りを忘れた失敗だろう。もう一度開けて。（開ける）

(遠くに立っている。お盆にカップを載せている。閉める)

アケミ けっこう遠い。なんとかかなりそうじゃない？

シゲミ でも純ちゃん。本当にいいの？こんな、リアリティーのない私達と、やっていけるの？

純 いいえ、何を言ってるんですか。リアリティーはそこに転がってるものじゃなくて、努力して獲得するものですよ。ははは。

ユウ 純ちゃんーん！（いきなり後ろから抱きつく）

(曲。照明。ドカーンと)

みんな うわー。(仕方なく去る)

ユウ 逃げて！あたし達の事はもういいの。運命。そう、運命だったのよ。

純 何が運命なんだよ。今までずっと一緒だったじゃないか。

ユウ 所詮、あなたと私達は住む場所が違うのよ。

純 ま、まあ、それはそうだけだね。

ユウ あなた達人間は、私達を大量破壊兵器で抹殺しようとするでしょう。

純 ああ、あの、もくもくと煙の出るやつ。

ユウ 大量破壊兵器を使うことは、あなた達の世界じゃあ悪い事じゃなかったの？

純 う、うん。

ユウ それに、あの地雷。

純 ああ、こんな箱にネバネバしたものが張ってあるやつ。

ユウ 対人地雷を許しちゃいけないわ。

純 すみません。

ユウ あなたを責めてるわけじゃないのよ。

ただ、あなたはいつか自分の世界に帰って行ってしまいう人なんでしょう。そのとき、少しでもいいから思い出してほしいの。私達の命について。

純 命について……。

ユウ 私達だって、命ある生き物なのよ。

純 ユウゴキ。

ユウ 私達だって、カブトムシやクワガタムシのようにかわいがられたいの。何が違うの？
あんまり変わらないじゃないの。茶色で、テカテカしてて、たまに飛ぶ。何が違うの。
純ちゃん教えて。ねえ、教えて……（可能なら泣く）

純 ユウゴキ。ごめん。おれたち、間違ってたよ。

ユウ 純ちゃんに謝ってもらいたいわけじゃない。ねえ。私って……気持ち悪い？

純 え？そんなことな……

ユウ ほんとの事を話して。気持ち悪いんでしよう？命を大事にとか、一寸の虫にも五分の魂とか、
いろいろ言ってるけど、ほんとのところは気持ち悪いものは……殺したいんでしよう！

純 ち、ちがうんだ、ユウゴキ。

ユウ ちがわないわよ。どうせ私達なんか……う。う。（吐き気）

純 え？ユウゴキ？

（そこにアケミゴキとシゲミゴキが走ってくる）

アケミ ユウゴキ。ここは危険よ……あ。

シゲミ ユウゴキ！（駆け寄って）……妊娠……してる？

ユウ う。

（二人で純一郎を見る）

純 えー？やっぱりそういうことだったんだ。

アケミ 虫けらのように捨てるつもり？純ちゃん。

純 虫けらのようになって？え？ようになって？

シゲミ アケミ。何を言うの。純一郎はあのナミエに戦いを挑んだ勇者なのよ。しかも、
ナミエはあの戦いに敗れて入院した。ニトログリセリン中毒でね。すごかった。
ほんとに、すごかったのよ、純一郎は。

アケミ 知ってます！そんなこと。ただ私、ユウゴキのことが……。

(スモークがどこからか漂ってくる。千石よろけながら登場)

千石 う。

純 え？こいつとも、やっちゃったのか？

千石 大量破壊兵器だ！

みんな えー！

千石 ナミエだ。ナミエが退院してきたんだ。うー！(仰向けに倒れて、手足をばたばたする)

ゴキたち センゴキー！

(スモークマシンを持ってナミエ登場。曲。ゴジラみたいな)

ナミエ はーははは。ほーほほほ。死ね死ねー！

ゴキたち うー！

純 やめる。やめてくれー！

ナミエ はーははは。ほーほほほ。アー、なんだか気持ちいい。

ユウ 純ちゃん。・・・さようなら。

純 ユウゴキ！ユウゴキ！

ナミエ 死ね死ねー。みんな死んじやえー。

純 ちくしょう！爆弾だ。爆弾でやつを止めないと・・・。(手作り爆弾を取り出す)

(ゴキたち集まってくる。)

シゲミ 純一郎！この爆弾であいつを止められるのか？

純 はい。ちょっと待ってくださいね。この赤いコードを、フィラメントに。青いコードをニトログリセリンに繋いでですね・・・。

(曲は終わる。照明ももどる。間。千石、ドアを開けてみる。ノック寸前のメイドが立っている。あわてて閉める。)

純 あ。

ナミエ 千石さん！

千石 分かった。・・・みんな聞いてくれ。純一郎の回想シーンはここで終わる事にする。

みんな えー！

ユウ そんなばかな。これからって時に、それはないでしょう。

アケミ そうですよ。純ちゃんはまだまだやれます。

シゲミ ここで終わりじゃ、納得できませんよ。

千石 いったん終わって、また明日やろう。

ナミエ そ、そんなこと出来るんですか？

千石 きつと出来る。今持つてるコード、その、赤いコードと青いコードを間違えなければいいんだ。

純 今日間違えないで・・・。

千石 明日間違って繋ぐ。

純 ええと。(パソコンをいじる)次のステップは黄色と黒のコードを繋ぎます。これも危険な作業です。

アケミ それよ。そうしましょう。

シゲミ でも、黄色と黒のコードをどうやって間違えればいいのよ。

ナミエ いろいろ方法はあるわよ。イカ墨スパゲッティを食べて、イカ墨がコードにかかっちゃったとか。

ユウ おでんを食べようとして、黒いコードにからしを塗っちゃったとか。

純 分かりました。やってみます。

千石 だから、今日は間違えないで、赤いコードを・・・

純 フィラメント。

千石 青いコードを・・・

純 ニトログリセリン。

千石 そう、それでいい。

アケミ この青いコード・青と言っても少し緑っぽい信号機の青よね。

純 分かってます。

シゲミ 色だけじゃなくって、右、左でも覚えましょうよ。こう正面を向いて、右が青で、左が赤。

純 いや、右が赤で、左が青です。

ナミエ え、ちよと。逆じゃないの、それ。

純 いや。今のは信号機の色ですよ。右が赤で、左が青。

ユウ 純ちゃん、そんなこと覚えてるの？

純 ええ？みんな覚えてるでしょう？交通信号だもん。

アケミ 歩行者用の信号機は？

純 上が赤で、下が青。

シゲミ すごーい。私覚えてなかった。

千石 よし。最初からもう一度やってみよう。純一郎が部屋に帰ってくるところから。

(みんな、うなづく。暗転。オープニングの曲。夕日。純一郎帰ってくる。最初と同じ。ヘルメットを脱ぎ、かばんを置き、ため息。ガスコンロをガチャッとやる。パソコンをいじる。ため息。コンビニの袋からカップラーメンを取り出す。電車の通過音。爆弾を取り出し、パソコンを見る。コードを持って悩む。ノック。またノック。扉を開ける。千石とユウが立っている。)

ユウ あのう。すこしよろしいですか？

純 なんですか？

ユウ 最近の日本についてどうおもわれますか？

純 最近の日本？

ユウ はい。いじめやニートの問題がですね・・

純 宗教には興味ないですから。(閉める)

千石(声) じゃ。となりへ行ってみよう。

(純一郎が座ると、いきなりドアがバーンと開きナミエが立っている)

ナミエ ただいまー。

純 お帰りー。(顔は上げない)

ナミエ す、すみません。また部屋を間違えちゃいました。すみませんでした。

(ナミエ、閉めて去る。純一郎はドアに鍵を閉める。)

純 赤いコードを・・・フィラメント。青いコードを・・・ニトログリセリン。

(ゴキブリを見つける。ゆっくりスリッパを取りにいき、バンバンたたくが逃げられる)

純 ちきしょう。逃げられた。

純 赤いコードを・・・フィラメント。青いコードを・・・ニトログリセリン。はいはい。

(コードを繋ぐ。とたんに暗くなる。純一郎はストップモーション。役者紹介が終わるまで。ドアの向こうに明かり。ドアの窓越しにメイドがぼんやり見える。ドアをバンバンたたく。)

メイド(声) ちよつと！どうしたんですか？なんか今、大きな音しましたけど？

ちよつと！何があったんですか？！鍵かかっている・・・おい！大丈夫ですかー！
・・・救急車呼びましようか？・・・だめだこりゃ。(携帯を取り出す)あの一、
もしもし、今ですね、爆発があったんですよ・・・はい・・・場所は・・・はい・・・。

暗転

2007・3・16